

港都横浜の意気を示す

——横浜市開港記念会館（旧開港記念横浜会館）の装飾壁画について（1）——

手塚恵美子*

はじめに

横浜に数あるランドマークの中でも、神奈川県庁舎、横浜税関、横浜市開港記念会館は、それぞれキング、クイーン、ジャックの愛称で親しまれる特徴的な塔を持ち、「横浜三塔」として観光と都市のシンボルとなっている。[fig.1・2・3] いずれも人々に強い印象を与える魅力的な外観を、あえて一言で形容するなら、キングは重厚、クイーンは優美、ジャックは華麗という言葉がふさわしい。いつの頃からか、横浜港に入港する船舶の船員たちが、トラップの絵札になぞらえて呼び始め、これら3つの塔を海上から見つけると、横浜に来たこ

とを実感したという。親しみを込めた呼び名は、それぞれの塔の特徴を実に良く言い当てている。

竣工年で言えば、キングの神奈川県庁舎は1928（昭和3）年、クイーンの横浜税関は1934（昭和9）年、ジャックの横浜市開港記念会館は1917（大正6）年で、絵札では若々しいイメージのジャックが、建物の建築年数としては一番年長に当たる。しかし建築とい



fig.1 神奈川県庁舎 キングの塔（1928年）



fig.2 横浜税関 クイーンの塔（1934年）



fig.3 横浜市開港記念会館 ジャックの塔（1917年）

* 日本文化学科 非常勤講師

うものが、建てられた時代の空気をまとい続けるものであるならば、ジャックはキングやクインよりも若き横浜の一時代を髣髴させるという点において、やはり最も少壮の青年と言えるだろう。

高さ36mのジャックの塔が粋で華麗であるばかりでなく、横浜市開港記念会館は内外の装飾の華やかさで見ざる者を魅了する。赤煉瓦と白い花崗岩の対比が鮮やかな外壁、ドームやドーマーウィンドウで賑やかに飾られた屋根、アーチを描く装飾的な大窓に眼を奪われつつアプローチしてゆく時の高揚感は、正面入口を入りクラシックな内装に包まれると、どこか心和むような安堵感へと変わる。玄関ロビーのモザイク・タイル床に懐かしさを覚えながら右手の階段を上ってゆくと、2階の広間左手には鮮やかな色彩のステンドグラスが嵌め込まれており、落ち着いた空間の中にはとっとするような煌めきを放っている。[fig.4] これは中庭側の階段室の窓いっぱいに爽やかな色合で、海と光とカモメに囲まれ、蒸気をくゆらす《ポーハタン号》を表したステンドグラス [fig.5] とは好対照な、原色の赤、青、緑、黄色が印象を支配する、和風モチーフの大作である。そして、今上ってきた階段室を振り向くと、明るい外光を内部に降り注がせるアーチ型の大窓のデザインも素晴らしく [fig.6]、この建物の装飾の主役は窓とステンドグラスであるかのような存在感があるのだが、さらに進むと2階広間奥の左右の壁面を、向かい合うように2枚の絵画が飾っている。[fig.7・8]

豪華な金色の額に縁取られ、その上を木枠とガラスケースに覆われて、これらもまた重要

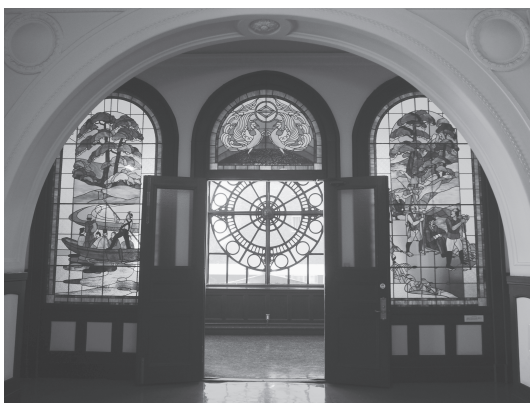


fig. 4 横浜市開港記念会館 2階ステンドグラス (1927年)



fig. 5 中庭側階段室ステンドグラス 《ポーハタン号》 (1927年)



fig. 6 2階広間から見た現在の階段室
1917年竣工時から1923年関東大震災による内部焼失まで、大窓両側の壁を2面の壁画が飾っていた。[fig.11] 参照。



fig. 7 「開港前の横浜村」(1927年) 75 × 198 cm
現在の横浜市開港記念会館展示状況



fig. 8 「大正期の横浜港」(1927年) 75 × 268 cm
同左

な装飾であることがうかがわれるのだが、表面のガラスに天井から下がる照明が反射して、一見しただけでは何が描かれているのか見えにくい。近づいて目を凝らすと、一方の絵には高い視点から俯瞰した長閑な海辺の寒村 [fig. 9]、もう一方には、やはり小高い丘から見下ろしたような構図で、煤煙をたなびかせる煙突群や工場、倉庫、家々で埋め尽くされた街並み、その向こうには様々な船舶が湾内に停泊し、あるいは航行する港町の情景が描かれている [fig. 10]。そして、絵の解説には「開港前の横浜村と大正期の横浜港」、作者は「和田英作画伯」と表示されている。

和田英作(1874-1959)は、明治から大正、昭和にかけて活躍し、東京美術学校(現東京藝術大学)の校長もつとめた洋画界の重鎮であったことが知られている。しかし、この壁画にまつわる制作の経緯や歴史的価値については、これまで詳細に論じられることはなかった。壁画の制作年は1927(昭和2)年とされるが、かつてこの建築が「開港記念横浜会館」として竣工した1917(大正6)年には、同じテーマで数倍の規模の壁画が階段室のアーチ窓左右

の壁面を飾っていた。
[fig. 11] [fig. 6 参照]
階段を上りきった2階
広間の天井には、やは
り和田の手になる大天
井画が設置されていた。
しかしそれらは、1923
(大正12)年の関東大

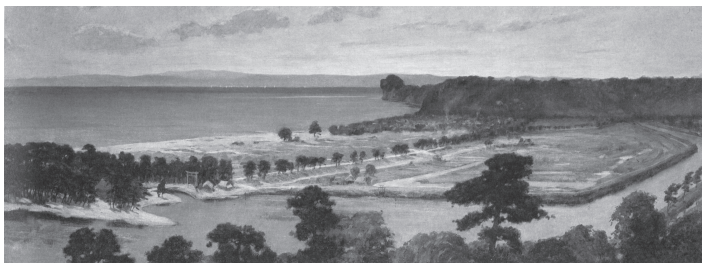


fig. 9 「開港前の横浜村」

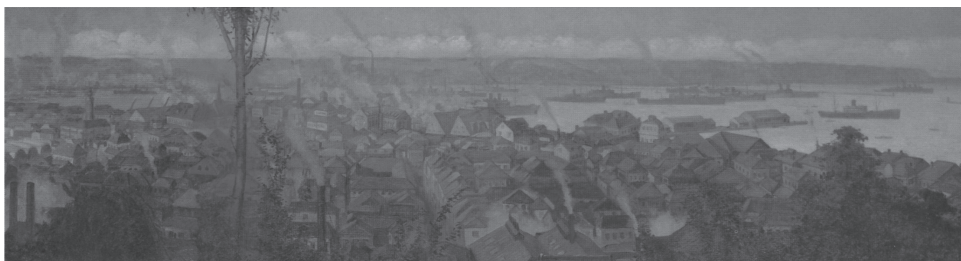


fig. 10 「大正期の横浜港」



fig. 11 オリジナルの壁画「開港以前の横浜村」
が設置された竣工時の階段室

震災で会館内部とともに焼失し、4年を経て会館が復興した後に、サイズを縮小し場所を移して再現されたのが現在の2面の壁画なのである。1959（昭和34）年、建物は「横浜市開港記念会館」と改称された。1969（昭和44）年に壁画の保存問題が浮上し、建築そのものの保存に関する論争へと発展した際には、横浜市民の間にこの歴史的建造物の重要性が再認識される機会ともなった。市民の声によって守られた会館は、1989（平成元年）年、市政100周年・開港130周年を迎えるに当たって、震災時に

失われたドームと屋根の意匠が創建時の姿に復され、9月に重要文化財に指定された。そして1859（安政6）年の開港以来、日本の近代を切り開いた港都横浜の隆盛の軌跡と、近代的文化を受け入れ、発展させ、守り伝えてきた、横浜市民の誇りと気概を示す近代化遺産として、今も愛され続けている。そのような歴史をふまえて、本稿では、開港記念横浜会館を飾ったオリジナルの壁画（1917年）、そして現在の横浜市開港記念会館に現存している壁画（1927年）について、その制作経緯と歴史的意義を明らかにしてゆきたい。

なお本稿は、横浜市開港記念会館のガイドボランティア団体ジャックサポーターズ向け研修講座「洋画家和田英作の世界～横浜市開港記念会館壁画をめぐって」（於 横浜市開港記念会館、2011年11月5日）における筆者の講演内容の一部を、拡大・修正・再編したものである。この講座を通じて、開港記念会館を愛する横浜の方々が、同館に現存する壁画のみならず、作者である和田英作の人と業績、そして過去の壁画・天井画に対して深い関心を持っておられることを知った。まだ調査・研究が十分とは言えないが、現時点で筆者が知りえた事実と考察を記し、関心をお持ちの方々の参考となるようなら幸いに思う。また、関連情報をご存知の方々からご教示、ご叱正いただき、さらなる情報集積の契機となることを期したい。

1. 開港記念横浜会館と建築装飾

まず、1917（大正6）年の竣工に至るまでの開港記念横浜会館建設の経緯をたどってみよう。現在の会館敷地である横浜市中区本町1丁目には、1874（明治7）年から1906（明治39）年まで、「横浜町会所」[fig. 12] が建っていた。アメリカ人建築家リチャード・P. ブリジェンス設計によるこの洋風建築は、30年以上にわたって横浜貿易商人の拠点として、またタウンホールとしての役割を果たし、特徴的な塔から「時計台」として親しまれていたが、1906（明治39）年に隣家の失火から類焼、焼失してしまう。新たな会館を、という計画が進められ、1909（明治42）年に開港50周年記念を迎えるのを機に、建設計画の実施が決定された。1913（大正2）年には設計の懸賞コンペが行われ、翌年9月着工、1917（大正6）年6月に竣工、7月1日の開港記念日に開港記念横浜会館として開館した。

建築様式的には、いわゆる辰野式フリークラシックと呼ばれる赤煉瓦と白花崗岩を組み合わせた外観意匠を採用し、時計塔、角塔、八角塔を配して、大小ドームを架けた変化に富む構成を見せており、明治期以降さかんだった赤煉瓦建築の延長上に達成された、高い完成度を見せる大正期の建築として評価されている¹⁾。

現在の内装は、1927(昭和2)年の会館復興時の状態を継承しているが、1917(大正6)年の創建時の内装はこれより



fig. 12 横浜町会所 (1874 年竣工、1906 年焼失)

もはるかに豪華で、和洋折衷の様々な意匠の仕掛けに富んだものであった。地下1階、地上2階、計62室の会館の中心は、1・2階吹き抜けの公会堂で、当時の新聞報道によれば²⁾、緞帳が掛けられた舞台のアーチ型飾縁中央には船を象り、「ペリーの来朝に依つて始めて輸入された西洋文明が具象化され」、「其左右には開港条約に参列した武士の紋所が記念の為に彫刻されて」いた。直径7尺5寸(約2.27m)のステンドグラスによる天井中央グローブ照明は、「敷島の 大和心を人間は 朝日に匂ふ 山桜はな³⁾」の一句を利かせ、武士の紋所⁴⁾と合わせて、「大和民族の国民性」を表したのだという。本居宣長の歌に重ねて、朝日に映える山桜の美しさを愛でる日本人の心が、近代日本にもたらされたステンドグラスと電灯照明という西洋文明によって表現された。それは横浜市民にとって、さながら公会堂という近代的な集いの場を照らす曙光のように感じられたのではないだろうか。2階の貴賓室は日本式の八角形のプランが特徴的で、白木の天井中央には径7尺(約2.12m)の「鳳凰来儀の図が木象眼で描かれ」ていた。広間のステンドグラスは、西洋の技法を用いて日本の「ありし昔を偲ばせる駕籠屋と渡船場の風俗模様」を描き出し、貴賓室へ通じる階段には「開港の使命船」たるポーハタン号のステンドグラスが「しつとりと落付いた」色調を見せていた。「百人分の会食が出来る食堂」には、「日本風の各入口に果物、魚、鳥などの食膳に上る動植物の木象眼が施され」という、和風デザインに組み合わせた西洋的発想による装飾が取り入れられていた。このほか各室の緞帳、窓掛、絨毯、羽目板など、目を見張るような数多の建築装飾は同会館の「誇り」となるものであり、それはそのまま横浜市民の誇りであっただろう。

和田英作の壁画・天井画に関する記事については後述するが、このように、新聞、雑誌、記念刊行物の中に紹介された建築装飾の中で、ステンドグラスであれば宇野澤組ステインドグラス製作所、内装業者としては三越呉服店、高島屋、杉田屋、木彫及象眼は後藤仙之助などの名前が挙がっているが⁵⁾、制作者個人の名が繰返し強調され取り上げられているのは和田英作だけである。この頃には既に知名度の高かった「和田画伯」が手掛ける壁画・天井画は、数々の建築装飾の見せ場の中でも呼び物となる芸術作品であり、建築の格を高め、権威を持たせる機能をも担っていただろう。

では、なぜ壁画・天井画の揮毫者に和田が選ばれたのか、その理由を彼の人脈と業績の中に探ってみよう。

2. 和田英作と横浜

i) 建設地との縁

和田英作は鹿児島県出身で、3歳の時に家族と上京して以来、東京で育ち学んだので、横浜と特に直接的な地縁があった形跡はない。しかし、この開港記念横浜会館の壁画を手掛けることになった時には、ある感慨を抱いたかもしれない。というのも会館建設地は、かつて横浜町会所が建つ以前に、岡倉天心（1863-1913）の生家があった場所として知られ、開港期より1873（明治6）年まで、天心の父勘右衛門が支配人をしていた越後藩の生糸売込店「石川屋」が置かれていた。そして和田は、東京美術学校で学んでいた時代に校長をつとめていた天心に対して、特別な恩義を感じていたのである。

東京美術学校に西洋画科が開設されたのは、開校後7年を経た1896（明治29）年のことだが、教鞭を執ることになった黒田清輝（1866-1924）、久米桂一郎（1866-1934）、藤島武二（1867-1943）らとともに、文部省留学生候補であった岡田三郎助（1869-1939）と和田も助教授に任命された。助教授と言っても、和田と岡田の場合は、近い将来、文部省留学生として海外へ派遣されることを見込んでの腰掛けポストで、月給15円をもらいながら、生徒たちと一緒に、毎日絵を描くという呑気な立場だったようだ。しかし、この時弱冠21歳だった和田は、やがてその立場を心苦しいと思うようになり、翌年校長の岡倉に辞任を申し出て、あえて学生となることを希望した。はじめは「助教授から学生になるなんて例がないから困る」と渋っていた岡倉だったが、言い張る和田を特別に西洋画科4年の選科学生とするよう取り計らってくれた。のみならず、4年生への編入であるから、すぐに卒業制作に取り掛からねばならなかった和田に対して、学校は絵具、カンヴァスなどの画材やモデルを官費で支給し、制作のための部屋までも貸与してくれたのだという。そして、自身の代表作のひとつとなり、明治洋画の秀作に数えられることになる《渡頭の夕暮れ》を描き上げた和田は、「こんな幸福な卒業製作をやったものは、先ず私一人位なものでしょう」と回想している。卒業後、海外留学を待つ間には、無給ながらも西洋画科の助手という名目で学校に残れるよう配慮してくれた岡倉に対して、和田は「学生の為に親身も及ばぬ世話をされた方でした」と述べている⁶⁾。その天心の生誕の地に開港記念横浜会館が建つことを知っていたなら、時が経ち、世に名を挙げた自分が、内部装飾として重要な作品の揮毫をまかされることになるとは、和田にとっては感慨深いものがあったのではないだろうか。

少々横道にそれたが、こうした逸話を知ると、和田への装飾画委嘱と岡倉天心との関係の間に、何らかの繋がりがあったのではないかと考える向きもあるかもしれない。実際、筆者はそうした問いかけを受けたこともある。だが、そのような事実を示す資料は知られていないし、岡倉は和田が卒業した翌年、1898（明治31）年には東京美術学校を去り、1913（大正2）年9月2日に52歳の若さで病没している。彼の生前、開港記念横浜会館の設計はまだ定まっておらず、もちろん建築装飾計画も始まってはいなかった。

ii) 塚本靖

では、どのような要因が和田を横浜へ呼び寄せたのか。それは、開港記念横浜会館建設計画のそもそもの始まりから関わっていた、塚本靖（1869-1937）[fig. 13] との関係を考える

ことが出来るのではないだろうか。壁画委嘱の経緯そのものとは少し離れるが、会館建設計画の一端を知る上でも興味深いと思われるので、塚本の経歴と開港記念横浜会館との関わりについて、以下に述べてみたい。

今ではさほど知られていないが、かつて塚本靖は、伊東忠太（1867-1954）、関野貞（1869-1935）と並ぶ建築界の「三元老」、「帝大建築科の三尊といふべき先覚」と目される存在であった⁷⁾。彼は、1893（明治26）年帝国大学工科大学造家学科（1897年に東京帝国大学、1898年に建築学科と改称、現東京大学工学部建築学科）を卒業、大学院では建築装飾法を研究した。1898（明治31）年同大学講師嘱託、翌年助教授、1902（明治35）年教授となつて以来、1929（昭和4）年まで在職し、社会的にも建築学と建築装飾、意匠等の専門家として幅広い活躍を見せた。東京美術学校でも、1893（明治26）年から建築装飾術を講じ、西洋画科と同時に開設された図案科では、1899（明治32）年まで建築装飾史、建築装飾等を担当した。この頃から和田とは面識があったと思われるが、和田の渡欧とほぼ同時期の1899年から1902年にかけての欧州留学時には特に親しく交際し、その友情は塚本が東京帝国大学名誉教授となつた晩年まで続いた⁸⁾。

開港記念横浜会館は、1918（大正7）年竣工の大阪市公会堂（現大阪市中央公会堂、大阪市北区中之島）と並んで、大正期の本格的公会堂建築の先駆けとなつた記念建造物と位置づけられ⁹⁾、両者ともに日本における建築設計競技の初期の事例として知られる。数知れないほど多くの建築設計、博覧会、展覧会、意匠図案等の審査委員をつとめた塚本は、開港記念横浜会館の懸賞付き設計コンペにおいても、審査員に名を連ねている。1913（大正2）年に公示された設計募集規定によれば、設計応募作の審査員は、横浜市の行政幹部3名と建築の専門家3名、すなわち、横浜市長・荒川義太郎、横浜市会議長・金子政吉、横浜市助役・斉藤松三と、工学博士の塚本靖、伊東忠太、大澤三之助（1867-1945）の6名で構成された¹⁰⁾。

伊東忠太は1892（明治25）年、大澤三之助は1894（明治27）年に帝国大学工科大学造家学科を卒業、同時期に辰野金吾のもとで学んでいた塚本とは、生涯を通じて深い友情を結んだ。仕事の面でも、伊東は、東京帝国大学の同僚として、約30年間をともにした。大澤は東京美術学校図案科講義を同時期に嘱託されて担当科目を分け合い、1914（大正3）年から1921（大正10）年にかけて宮内省内匠寮に勤務していた時代には塚本に助力を仰ぎ、たびたび各種審査を一緒につとめた¹¹⁾。彼ら三人は、建築装飾に対する鋭敏な意識を持っており、建築・建築装飾関連の業績や著作は言うに及ばず、美術・工芸・意匠図案にも造詣が深かった。東京美術学校の教育活動との関わりをはじめ、美術家との交流や美術雑誌への寄稿など、美術界と密接なつながりを持ち、和田英作とも近い存在であった。

塚本靖と開港記念横浜会館との関わりは、まだ建設地が定まらない頃から始まっている。1911（明治44）年夏には、記念会館建築委員会において塚本の意見が聴取されたことが既に指摘されているが¹²⁾、当時の報道と対照させながら塚本靖の日記を追ってみると、会館建



fig. 13 浪子夫人と塚本靖
1922年5月

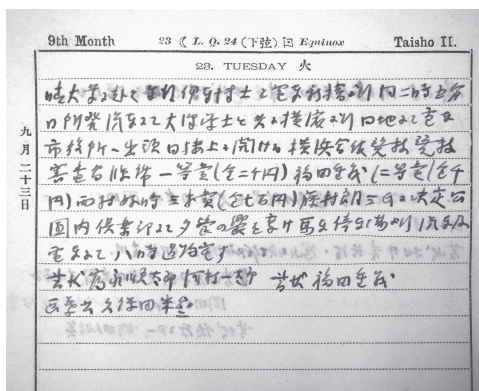


fig. 14 「塚本靖日記」大正2年9月23日

「関スル臨時委員会」の市公民メンバーであった原富太郎（三溪 1868-1939）、大谷嘉兵衛（1845-1933）、市参事会メンバーの平沼専蔵（1836-1913）と考えられる¹⁵⁾。

その後一度は横浜公園に和風建築の会館を建てることが決まった¹⁶⁾。秋には会館の意匠が東京帝国大学工科大学へ依頼され、出来上がった案が委員に示された¹⁷⁾。その報道と対応するように、塚本の日記にも、9月14日には「横浜市技師山本宇三吉氏来り同市公会堂略設計調整を依頼す」とあり、9月30日、10月1日には、横浜市公会堂の設計図を作成、10月3日来訪した山本に公会堂の図を渡したことが記されている¹⁸⁾。しかし結局、同年11月22日の記念会館臨時委員会において、会館は本町通りの横浜町会所跡地に西洋建築を建てることになり、設計は懸賞募集で広く募ることが決定された¹⁹⁾。こののち設計コンペの応募規定は1913（大正2）年4月に公示され²⁰⁾、100に達した応募作の審査が行われたのは9月23日である。その結果、東京市技師・福田重義（1887-1971）の案が1等選ばれた²¹⁾。この日、塚本靖の日記には、伊東、大澤と連れ立って汽車で横浜へ出掛け、横浜市役所楼上で横浜会館競技審査に当たったことが記されている²²⁾。[fig. 14] ちなみに1等賞金は2,000円、塚本に支払われた審査謝礼は、2等賞金と同じ1,000円であった²³⁾。

1等当選者の福田は、1908（明治41）年に東京帝国大学を卒業、のちに「塚本先生には学生の頃から一方ならぬお世話になつて居た」「其後三十年度々学校や学舎に於て御目にかゝつたが、いつも広汎多岐に渉つて談笑せらるゝ先生の樂天的ダブルルチンの温容を忘れることは出来なかつた」と回想している²⁴⁾。

初期の設計コンペでは、選ばれるのは設計者ではなく設計図案であって、設計当選者とは別な建築家が実施設計を担当する事例が多く見られたが、横浜会館で実施設計を手掛けたのは、長崎県技師から横浜市技師に転身してきた山田七五郎（1871-1944）を中心とするスタッフだった²⁵⁾。なぜ長崎から山田が引き抜かれてきたのか、はっきりしたことは分かっていないが、長崎県知事から横浜市長に就任した荒川義太郎（1862-1927）、安藤謙介（1854-1924）との関係が推測されている²⁶⁾。山田は1899（明治32）年東京帝国大学を卒業しており、在学中に大学院生であり講師もつとめ、卒業近くには助教授となった塚本の後輩に当たる。また、1913（大正2）年東京帝国大学卒業後ただちに山田のもとで横浜市技師をつとめることになった佐藤四郎（1883-1974）も、在学中は塚本の講義を聴いたことだろう。

このように考えてくると、横浜会館の建設計画に当初から関わっていた塚本の周辺の人物

設計画との接点について、具体的な内容を拾い上げることができる。まず、同年7月18日、横浜市建築営繕の実質的な中心人物であった同市技師山本宇三吉¹³⁾が来訪、開港五十年記念館について語り合い、その後、7月26日には「横浜に到り馬車 公園内の一旗亭にて原、大谷、平沼諸氏と食事後 市役所に赴き 同地開港五十年記念館の建築に就意見を述」べている¹⁴⁾。塚本が横浜公園内の料理店で食事を共にした3名は、同年3月に組織された「開港記念会館設備

が、設計コンペ審査員、当選設計者、実施設計者であることが見えてくる。さらに塚本は、会館本体がほぼ完成した1916（大正5）年12月には、装飾全般の顧問も委嘱されていた²⁷⁾。塚本の日記12月4日には、佐藤四郎が塚本宅を訪れ「横浜会館装飾図案の批評の為に来浜を乞ふ」とこれを許諾し、8日には横浜に赴き「市役所楼上に於て会館装飾の諸案を見 午後同市有力者数人に合して右装飾に関する意見を述べたと記されている²⁸⁾。

こうしたことから考えられるのは、開港記念横浜会館の重要な装飾となるはずの壁画・天井画の制作者選定にも、塚本が関与した可能性があるのではないかということだ。例えば、先に述べた大阪市中心公会堂の貴賓室にも、洋画家・松岡寿（1862-1944）によって大画面の天井画・壁画が描かれ現存しているが²⁹⁾、これはやはり同公会堂の設計コンペの審査員で、建設計画の全体を統括した建築顧問の辰野金吾が、留学時代より親しかった松岡に頼み込んで実現したという経緯がある³⁰⁾。建築計画を熟知した人間でなければ、その建築にふさわしい装飾計画を立案することはできない。開港記念横浜会館の場合は、建築と装飾の両方に通じていた塚本と、留学時から親しい交際を続けていた和田との関係が、何らかの作用を及ぼしたのではないだろうか。

iii) 建築装飾の実績

そうであったとしても、もちろん、相応の実力と実績がなければ、重要な建築装飾の委嘱はありえないが、その点和田は十分な資格を備えていた。というのも、彼は当時既に東京美術学校教授として、また著名な洋画家として社会的地位を確立していたのみならず、それまでも数々の建築装飾作品を実現させていたからである。

その実績としては、岩崎彌之助高輪邸（現開東閣）舞踏室の壁画・天井画（1908年）を皮切りに、交詢社演芸室の壁画（1908年）、帝国劇場観客席上部天井画・食堂壁画（1911年）、東宮御所赤坂離宮喫煙室（現迎賓館赤坂離宮東の間）壁画（1914年）、中央停車場（現東京駅）皇室専用入口中央大ホールの壁画（1914年）、慶応義塾創立五十年記念図書館（現慶応義塾旧図書館）のステンドグラス原画（ステンドグラスは小川三知によって1915年完成）、日光東照宮宝物館の壁画（1915年）が挙げられる³¹⁾。特に、1914（大正3）年の東宮御所赤坂離宮喫煙室壁画は、皇室建築を飾る装飾画の御下命とあって、和田が心血を注いで完成させ、高い評価を得た。制作に際しては、塚本靖と伊東忠太が参考資料を提供し、大澤三之助も壁画完成の年に宮内省内匠寮技師となっている。先に述べたように横浜会館の設計競技に関わった三人にとって、和田は重要な装飾壁画を成功に導くことのできる揮毫者として、至近の芸術家であったと言えそうだ。同様の認識は、横浜会館の建設に携わった人々にも共有されていたと思われる。

こうした制作実績に加えて、和田が専門的な知識の面でも博学であったことは、壁画・モザイク・ステンドグラスなど建築装飾に関する講演録や著述がたびたび美術雑誌等に掲載されたことによって³²⁾、周囲に認知されていただろう。彼は、洋画家の中では装飾家^{デコレーター}として抜きん出た存在であったと言える。

また、彼は建築装飾絵画を手掛ける際に、東京美術学校教授という立場から、制作助手となる優秀な教え子ら身近な人材に恵まれていた。実は開港記念横浜会館の壁画制作にも、和田の助手をつとめた東京美術学校卒業生の存在が大きかったのだが、そのことも含めて、次

に壁画・天井画の制作過程を追ってみよう。

3. 壁画・天井画（1917年）の制作過程～制作開始から完成まで

i) 下絵段階

開港記念横浜会館の建設は、1914（大正3）年8月6日横浜市会による実施設計案承認、同年9月12日起工、1916（大正5）年5月15日上棟式、そして1917（大正6）年6月30日竣工という流れをたどった。その中のどの時点で、和田英作に壁画・天井画の制作が委嘱されたのか、はっきりしたことは分かっていない。しかし、和田が壁画の材料収集に着手したのは、1916（大正5）年12月であったようだ³³⁾。

翌1917（大正6）年2月12日、外郭工事が終わった会館は、内部の漆喰塗や天井塗、羽目板張りなどを残すのみとなり、緞帳、窓掛、家具などの装飾品を、三越、高島屋、杉田屋等が製作中であると報じられた³⁴⁾。いよいよ会館建設も仕上げの室内装飾の段階に入ってきた2月22日、壁画の内容が検討された様子を、翌日付の『横浜貿易新報』は「記念会館の壁画／和田画伯の揮毫に成る／横浜今昔の二面」との見出しで、次のように報じた³⁵⁾。

金港の偉観として^{やが}廳て市の中心を飾るべき開港記念会館は其中の公開堂だけでも此の七月一日の記念日迄に竣成したいと専任技師を始めとし着々其の工を急ぎつゝあるが、同館の本町通入口を這入つた両側の壁面には安政年間の所謂横浜村当時の面影と現代の横浜港とを対照的に描かれる筈で其の大きさは現代の方が五尺七寸の廿一尺、開港当時の方が二尺七寸の十七尺である。而して此揮毫は洋画家の泰斗和田英作氏が主任、有田四郎氏が助手として執筆される事になつて居るが既に其五分の一の縮写図は過般来有田氏が山手町フェリス女学校楼上を借て熱心に研究執筆した結果、^{ほぼしゆつたい}近付いたので、昨二十二日和田氏は来賓した上五十年前から横浜に在住して居る元濱町の田澤武兵衛、保土ヶ谷町の荒波七助両氏を市役所楼上に招じて其縮図を披いて一一両古老の意見を聴取した、斯くて和田、有田両氏は此談話を参考資料として近く公園内クリケット倶楽部の楼上を製作場に充てゝ愈々揮毫に着手するさうである。

壁画のテーマは、「安政年間の横浜村当時の面影」と「現代の横浜港」を対照的に描く方向性が示され、揮毫者は主任の和田英作だけでなく、助手として有田四郎（1885-1946）の名が挙がっている。有田は既に山手の丘に建つフェリス女学校の校舎階上を借り受け、横浜市街の風景を観察しながら構想を練り、5分の1の縮図を準備したことを示す内容である。市役所に招いた開港当時の横浜を知る古老二人に、壁画縮図を披露して意見を求め、この2月22日から間もなく、横浜公園内のクリケット倶楽部の階上をアトリエとして、いよいよ本画に着手する予定となったことが分かる。

1876（明治9）年に開園した横浜公園は、居留地の外国人の要求によって明治政府が建設し、「彼ら（外国人）と我ら（日本人）」の両方が利用する「彼我公園」と呼ばれた。1899（明治32）年に居留地が廃された後も、公園中央のクリケット場はYCAC（横浜クリケット・アンド・アスレティック・クラブ）が借地する外国人専用の「彼らのグラウンド」であ

り続けたのだが、その借地期間も1909（明治42）年で終了していた³⁶⁾。完全に「我らの公園」となった横浜市民の憩いの場で、港都横浜の歴史を示す壁画が制作されることとなったわけである。

3月6日午後には、横浜市役所の議長室に壁画の下図が飾られ、和田ら制作陣が、建設委員に対して構図の説明を行った。その際の『横浜貿易新報』の報道記事は、壁画・天井画制作に関して多くのことを教えてくれる³⁷⁾。下図に描かれた内容については、後にあらためて引用・考察するとして、以下に下図の内覧と制作過程に関する記述を引いてみる。

— 横浜開港記念会館を飾る今昔二面の壁画／茅舎横浜村の曙光と殷盛横浜港の紅陽 —

横浜開港記念会館の壁画の下図は、既報の如く昨六日の午後一時から市役所楼上議長室に飾られ、主任和田英作氏を始め、執筆者の有田四郎、安藤東一郎両氏に依つて、建設委員に其の構図に就て説明された。下図と云ふのは開港以前の横浜村と現今の横浜港と此二面であつて、前者は縦尺五寸、横二尺位、後者は縦尺五寸の横が五尺位のもので孰れもスケッチ風の油絵である。『現今』の方は有田氏がフェリス女学校の楼上に陣取つて熱心に写生してそれを氏の頭に依つて練上げたもの、『開港以前』の方は安藤氏が神奈川から或は紅葉坂から或は掃部山^{かもんやま}などから大体の地形を写生した上、昔の絵図や地図^{なかいば}に依つて半想像から描上げたもので、両者共に苦心の跡が仄見えて居る。〔…〕建築技師の話に「此方『開港以前』は十分な参考書類がないので困つたさうです。今日田澤武兵衛さんが自分の記憶で当時の図面を描いて呉れましたから、本物の絵の方は大分変るでせう」と構図が未だ完全でないと言ふ事を説明された。〔…〕

ここではまず、揮毫チームに安藤東一郎の名が加わり、有田四郎とともに、実質的な下図の構想と制作を担ったことが明確に示されている点に注目したい。彼らはともに東京美術学校西洋画科を1909（明治42）年に卒業し、先に述べた東宮御所赤坂離宮の喫煙室壁画の助手もつとめた。安藤は日光東照宮の宝物館壁画にも協力した。有田は、東京美術学校を卒業したのちも研究生としてとどまり、横浜の壁画・天井画を手掛けるまでに、たびたび白馬会展や文展に出品していた実力者であった³⁸⁾。

下図の写生地は、「現今の横浜港」担当の有田が既報の通り山手のフェリス女学校を選び、構図を「頭に依つて練上げた」。安藤は「開港以前の横浜村」を描くために、神奈川、紅葉坂、掃部山を巡った。現在では紅葉坂も掃部山も、みなとみらい地区に遮られて横浜港を臨むことはできないが、かつては見晴らしの良い景勝地であった。そうした写生地からの観察をもとに、「昔の絵図や地図」をも参考にしつつ「半想像から描上げた」苦心の下図だったが、そこに横浜の古老・田澤武兵衛が記憶を頼りに描いた開港以前の横浜村の図面を加味して、こののち本画の構図には大幅な修正が加えられることになった。

この時、主任の和田英作は2点の下絵について、「これは二つ共自分が手を着けたのでなく有田君と安藤君が描かれた物なので何とも申し上げられないが、両君の努力は非常なもので、スケッチするのに大分苦心されたさうです」と述べている。かつても今も、壁画揮毫者としては和田の名のみが挙げられがちだが、ここに見るように、実は言わば「和田英作ブランド」の集団制作であった。

一方、和田は「会館の入口には此壁画を左右にして、直径九尺の円天井には、平和と言ふ意味で花の咲き乱れた所に、鳩などを配らつた絵を描く筈になつて居る。むろん之は装飾的の調子を極く弱くしたもので、上から壓へ付けるやうな感じを失くす積りである」と天井画の構想について言及し、こちらには積極的に関わる意思を見せている。

そして、「本物のカンバスは既う公園の運動倶楽部楼上に張つてあるから直ぐにも着手する筈で、その出来上りは五月一ぱいの予定だと云ふ」と記事は結ばれている。

ii) 本画制作

その記事の通り、本画は下図内覧の翌日3月7日、直ちに着手された。下絵のみならず、壁画の本画制作も、そのほとんどを有田と安藤が手掛けたようだ。二人の壁画揮毫の様子を、3月15日木曜日付の『横浜貿易新報』は下記のように紹介している。

— 二枚の画布／運動倶楽部楼上／記念会館の壁画／木炭持つた有田君と安藤君 —
 大小二つの画布が屏風のやうに立て廻された中に若い画家の有田君と安藤君は隠れて居た。白い仕事着をきた安藤君は右手の画布の前に、^{ごぼ} 莫座を敷いて、其上に寝そべりながら手の先を動かして居る。横浜村の前景になる樹林を描てでも居たらしい。頭の上には横文字の冊子が開かれてあつた。有田君の周囲には色々の形をした家屋のスケッチが無造作に投げ出され〔…〕て居る。此二人の青年画家は此前の水曜日〔3月7日〕から公園内の運動倶楽部楼上に立籠つて記念会館の壁画を執筆して居るのだが「横浜村時代」の方はもう一週間も経てば色の方にかゝると云ふ〔…〕有田君は「今の横浜」の方のカンバスの前に立ちながら「どうも厄介でしてな、全く根気仕事ですよ、描いてる中に家の形などが判らなくなるので閉口です。チョイチョイ実物を見に行かなければなりません」とにっこりする。〔…〕「さあいよいよとなつたら徹夜で行るんですな」と二人は元気よく笑つた。描上りは五月一ぱいの筈だと有田君は言つて居た。

前述の通り、有田は写生に基き下絵を「頭に依つて練上げた」が、全体の構図は見たままの横浜市街ではなくとも、家の形など個々のモチーフは、実物に即して写實的に本画へ写し取ろうとしていた意思がうかがわれる。同記事中の壁画本画の描写内容や参考資料については、後にあらためて引用・検討することとしたい。

ところで、この壁画の技法について付言しておく、記事に「画布」と書かれているように、大型カンヴァスに油彩で描いたものを、油性糊料で張り上げる、マルフラージュ（パンチュール・ド・ラ・マルフレー）の技法が使われていた。これは、糊付け（糊付けされた絵画）といった意味で、フランスの近代壁画はこの方法で制作されている。壁画というと、イタリア・ルネサンスを代表する数々の大作のような、フレスコ画による作品を思い浮かべる人も多いかもしれない。しかし、フランスで絵画修業を積んだ和田たちが間近に接して身につけて帰ってきたのは、カンヴァスを支持体とするフランス式油彩壁画の方だった。この方法だと、現場で制作するのではなく、アトリエでじっくり仕上げて、最後に一気に張り上げるため、制作しやすいという利点がある。



fig. 15 『横浜貿易新報』1917年6月18日記事



fig. 16 有田四郎旧蔵、天井画完成記念写真のコピー

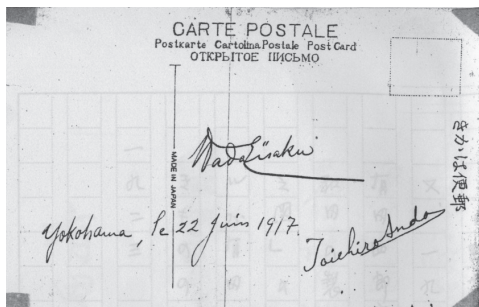


fig. 17 有田四郎旧蔵、壁画完成記念と思われる署名・地名・日付が記された郵便はがきのコピー

藤、有田の三人で協力して仕上げたようだ。6月18日には、『横浜貿易新報』紙上に、「新記念会館階段の間の天井画」との見出しで、カンヴァスを背景にした和田、安藤、有田の写真が掲載され、「公園運動倶楽部内にて執筆既に完成に近し」と書き添えられている⁴⁰⁾。[fig. 15]

その後間もなく、天井画が完成した時の記念写真と考えられるのが、[fig. 16]である。有田四郎のご遺族から、画家ゆかり

の地に建つ宮崎県立美術館へ提供された貴重な資料であり、天井画完成作の写真は管見の限りこの一枚しか見ることができない。複写が繰り返されたために画像が粗いが、和田が述べたように、大型の円天井に合わせた画面に花がちりばめられ、鳩が飛んでいるであろう空の情景が描かれているのが、おぼろげながら見て取れる。左手前には、天井画のモチーフの手本を常に生き生きとした状態で参照できるよう、アトリエに置かれたと思しき薔薇の鉢植えが見える。「富士薔薇太郎」と呼ばれるほどに、富士山と薔薇を描くことを愛し、薔薇の描写にはひとかたならぬこだわりを持っていた和田らしい。

この写真コピーが貼られた『有田四郎とその周辺』（私家版）⁴¹⁾の中には、「Wada Eisaku」「Toichiro Ando」「Yokohama, le 22 Juin 1917」と記された郵便はがきのコピーも収められている。[fig. 17] 和田英作、安藤東一郎の署名とともに、わざわざ「横浜, 1917年6月22日」と記された意味は、この日が天井画完成日、あるいは完成を祝した記念写真撮影日だったことを示しているのだろう。背丈に倍するような大型カンヴァスの前でポーズを取る4人[fig. 16]のうち、真中に立つ黒い背広姿が和田英作、その向かって左側に座っているのが安藤東一郎、さらにその左が有田四郎である。大作天井画を仕上げ、作業着を脱いで、背広にネクタイを締めた三人の表情の、何と晴れやかな達成感と安堵感に満ちていることか。和田の前で椅子に脚を組む第4の人物が誰なのかは、画像が見えにくいこともあり、判然としない。

その後、6月26日の『横浜貿易新報』には、壁画・天井画が既に横浜会館に搬入され、設置中であるとの報が見える⁴²⁾。

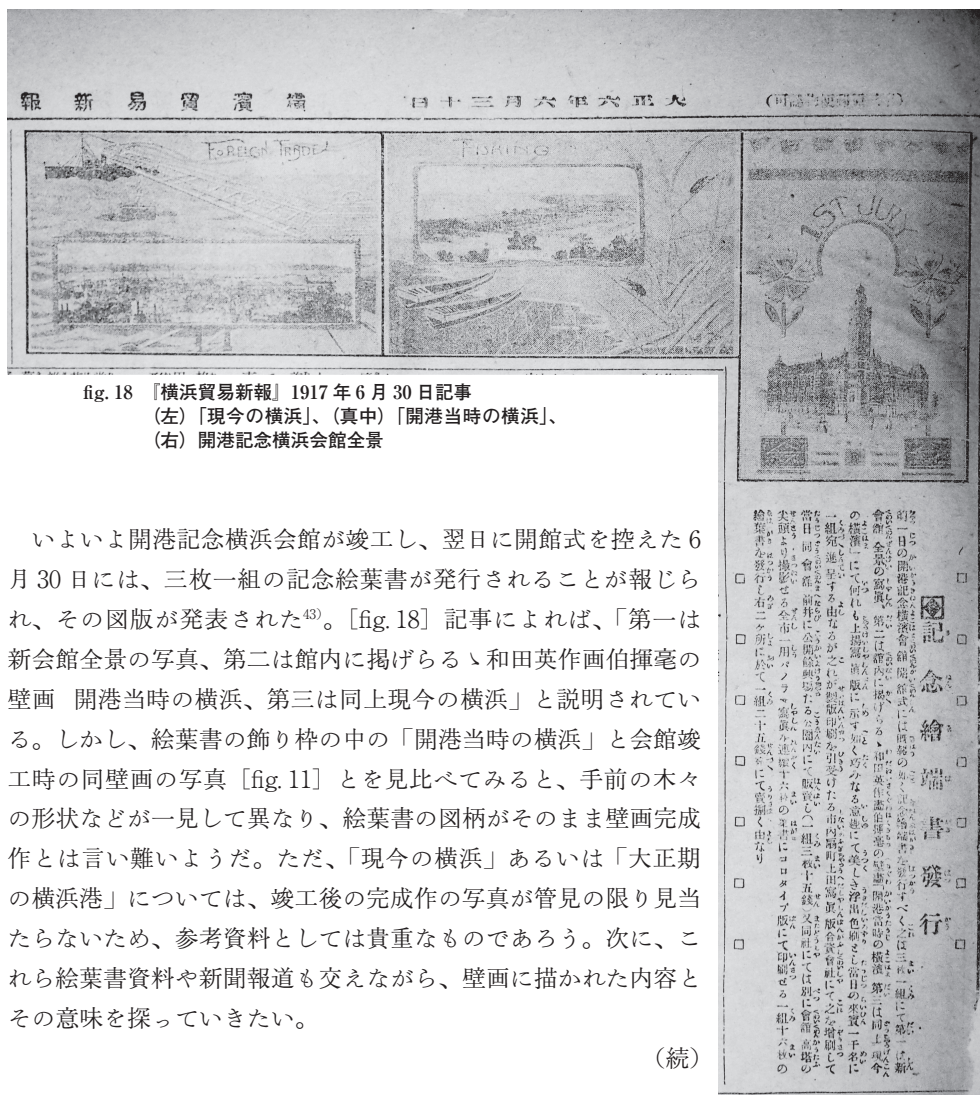


fig. 18 『横浜貿易新報』1917年6月30日記事
(左)「現今の横浜」、(真中)「開港当時の横浜」、
(右) 開港記念横浜会館全景

いよいよ開港記念横浜会館が竣工し、翌日に開館式を控えた6月30日には、三枚一組の記念絵葉書が発行されることが報じられ、その図版が発表された⁴³⁾。[fig. 18] 記事によれば、「第一は新会館全景の写真、第二は館内に掲げらるゝ和田英作画伯揮毫の壁画 開港当時の横浜、第三は同上現今の横浜」と説明されている。しかし、絵葉書の飾り枠の中の「開港当時の横浜」と会館竣工時の同壁画の写真 [fig. 11] とを見比べてみると、手前の木々の形状などが一見して異なり、絵葉書の図柄がそのまま壁画完成作とは言い難いようだ。ただ、「現今の横浜」あるいは「大正期の横浜港」については、竣工後の完成作の写真が管見の限り見当たらないため、参考資料としては貴重なものであろう。次に、これら絵葉書資料や新聞報道も交えながら、壁画に描かれた内容とその意味を探っていきたい。

(続)

註

- 1) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』横浜市教育委員会生涯学習部文化財課、2001年、pp. 9, 11。
- 2) 「近き矜り記念会館(上)(下)」『横浜貿易新報』1917年5月22・23日、第7面。
- 3) 引用表記は上記「近き矜り記念会館(上)」の通り。本居宣長が61歳の自画自賛像(1790年)に入れた同句とは表記が異なる。本居宣長記念館「宣長ワールド 解説項目～徹底分析・本居宣長六十一歳自画自賛像」(<http://www.norinagakinkan.com/norinaga/kaisetsu/tettei.html>, 2013年2月1日情報取得)参照。
なお、本稿中の引用文について、仮名は原文のままとし、漢字は適宜通行の字体に改めた。また、読みやすさを考慮し、適宜句読点あるいはスペースを補った。引用文中、難読箇所等には原文のルビを適宜残し、筆者が補ったルビや註は〔 〕で表した。
- 4) この「武士の紋所」は、「[…] 開港に直接尽瘁せし井伊掃部頭 堀田備中守 水野筑後守 永井玄蕃頭 井上信濃守 堀織部正 岩瀬肥後守 村垣淡路守等の紋所を以て鏤め […]

- 5) 註2および上記文献 pp. 50-52 のほか、開港記念横浜会館の建築概要・室内装飾に関する資料には次のよう

- なものがある。『開港記念横浜会館建築構造大要』1917年7月1日（前掲『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』pp.4-6に再録）。「記念会館縦覧案内」『横浜貿易新報』1917年7月1日、第11面（同pp.6-7に再録）、「開港記念横浜会館」『建築雑誌』第31輯第367号、1917年7月。「開港記念横浜会館建築工事説明書」『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年。
- 6) 岡倉天心とのエピソードについては、『季刊 清水』第34号、戸田書店、1998年、pp.44-45, 47-49（初出：和田英作「画壇の四十年 足跡を顧みて」『東京毎夕新聞』1934年8月30日～12月19日連載）を参照。
 - 7) 高嶋米峰「忘機院殿空蒼准亭居士」『建築雑誌』第51輯第631号、建築学会、1937年10月、p.20。および正木直彦「塚本博士と事を共にして」同、p.26。
 - 8) 前掲『季刊 清水』第34号、pp.79, 92-98。バリ留学時代の交友については、次の文献を参照。高階秀爾監修／今橋映子・ロバート キャンベル・馬淵明子・山梨絵美子責任編集『バリ 1900年・日本人留學生の交遊 『パルテノン会雑誌』資料と研究』ブリュッケ、2004年。同書所収解題拙稿「口絵3 和田英作《塚本靖肖像》」、同拙稿「パルテノン会の軌跡—会員たちの記録、日記、回顧録、書簡等より」pp.367-388、ほか。
 - 9) 前掲『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』、p.9。
 - 10) 同上、p.2、「開港記念横浜会館新築設計募集規定」第六條を参照。
 - 11) 大澤三之助「塚本靖君の思出」『建築雑誌』第51輯第631号、建築学会、1937年10月、p.12。大澤のプロフィールについては、鈴木博之監修・飯田喜四朗監修協力・内匠寮の人と作品刊行委員会編『皇室建築 内匠寮の人と作品』株式会社建築画報社、2005年、p.419を参照。
 - 12) 前掲『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』p.2参照。（以下、註16・17・18・19・20・21についても同）『横浜貿易新報』1911年7月22日、第2面に「記念会館委員会 来る廿六日市役所に於て過般の協議に基き塚本博士を聘して専務委員会を開き同氏の意見を聴取する筈」とある。
 - 13) 堀勇良「横浜市建築局前史」『昭和を生きぬいた学舎 横浜震災復興小学校の記録』横浜市建築局学校建設課／横浜市教育委員会施設課 編集・発行、1985年、p.62。
 - 14) 工学院大学建築学部建築デザイン学科・藤森照信教授研究室所蔵「塚本靖日記」1911（明治44）年7月18・26日の条。
 - 15) 1911（明治44）年3月14日、横浜市会において、市参事会より6名、市議員9名、市公民12名、計27名の「横浜開港記念会館設備ニ関スル臨時委員」が選出された。以降、記念会館建築委員会の協議によって、建設地、建築計画、競技設計などの検討が行われた。前掲『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』p.2。
 - 16) 『横浜貿易新報』1911年8月2日、第2面。
 - 17) 『横浜貿易新報』1911年10月4日、第2面に「▽記念会館の意匠（設計図ではない）は先きに東大の工科へ依頼し此程出来上つたさうだが之を専務委員に示した後協定する筈ださうな」と報じられている。
 - 18) 前掲「塚本靖日記」、1911（明治44）年9月14・30日、10月1・3日の条。
 - 19) 『横浜貿易新報』1911年11月23日、第2面。
 - 20) 『横浜市報』号外、1913年4月25日発表。
 - 21) 『横浜貿易新報』1913年9月24日、第2面。
 - 22) 前掲「塚本靖日記」1913（大正2）年9月23日の条。同日欄には「書状 福田重義」の文字も見える。
 - 23) 工学院大学建築学部建築デザイン学科藤森照信教授研究室所蔵の手稿本『履歴書 塚本靖』に、「横濱市長 開港記念会館募集図案審査謝礼として金壹千円贈与／大正二年十一月十三日」と記されている。
 - 24) 福田重義「塚本先生について」『建築雑誌』第51輯第631号、建築学会、1937年10月、p.23。
 - 25) 山田七五郎のほか実施設計スタッフには、矢代貞助（横浜市技師）、佐藤四郎（横浜市技手）、吉田鶴志（横浜市技手補）らがいた。前掲『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』p.4。
 - 26) 前掲、堀勇良「横浜市建築局前史」pp.63-64。
 - 27) 『横浜貿易新報』1916年12月10日、第2面に、次の記事が掲載されている。「会館装飾依頼／本市開港記念会館の内部装飾につきては種々考慮中なりしが愈々東京帝国大学工科大学教授塚本博士に依頼し其の意見に聴き不日何等か具体的に決定すべくしと」。前掲『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』p.13参照。
 - 28) 前掲「塚本靖日記」1916（大正5）年12月4・8日の条。
 - 29) 大阪市中央公会堂貴賓室の天井と壁を飾る大装飾画は、大阪にちなんだ歴史と神話が表現された歴史画の大作となっている。テーマは、天井画《天地開闢》、壁画《仁徳天皇》《商神素盞鳴尊》《工神太玉尊》。
 - 30) 森仁史「近代日本におけるデザインの創成—松岡壽と工芸教育」青木茂・歌田眞介『松岡壽研究』2002年、中央公論美術出版、pp.409-411。
 - 31) 詳細は拙稿「和田英作と装飾美術」『鹿島美術研究（年報第24号別冊）』鹿島美術財団、2007年、pp.188-202を参照。開港記念横浜会館以後の建築装飾としては、皇居吹上御苑花蔭亭の食堂壁画を藤島武二とともに

委嘱され、1931（昭和6年）年に完成させている。この作品については、児島薫「藤島武二・旭日を描く旅—花蔭亭壁画と御学問所を飾る絵画の制作について」『近代画説』第19号、明治美術学会、2010年、pp.18-24を参照。

- 32) 同上拙稿、pp.196,199。
- 33) 『図案彙報』図案新集第47号（附録）、1917年4月5日発行、p.3〔森仁史監修『叢書・近代日本のデザイン11』ゆまに書房、2008年に復刻、p.253〕に次のように報じられている。「〔…〕横浜記念会館は本年八月迄竣工の予定なりしも、建築委員の希望にて七月一日の開港記念日に開館式を挙ぐる事に決し、日夜工を急ぎつゝあり、而して同館大階段周囲の壁画は昔と今の横浜の景を和田英作画伯に依頼し、氏は已に旧臘初旬より有田、安藤の両助手と共に材料の蒐集に着手し、近々横浜公園内の運動倶楽部にて揮毫に着手する筈なるが、共に幅二十尺前後縦五尺七寸の大物なりと」。ここに見る「旧臘初旬」は、前年1916（大正5）年12月初旬を指す。また、1917年1月30日印刷、2月1日発行の雑誌『美術』第1巻第4号、p.31「藝苑時報」欄でも、「大階段周囲の壁画は去月中より和田英作氏執筆に着手したる由」とあり、他の記事との兼ね合いから、「去月」とは前年12月を指すと考えられる。
- 34) 『横浜貿易新報』1917年2月12日、第3面。
- 35) 『横浜貿易新報』1917年2月23日、第7面。同日の『読売新聞』第5面「豆えん筆」欄も、壁画に関して報じている。
- 36) 田中祥夫『ヨコハマ公園物語 港町の歴史を歩く』中央公論新社、2000年、pp.55-60。
- 37) 『横浜貿易新報』1917年3月7日、第7面。ちなみに、本記事と、前掲2月23日付同紙記事、いずれにおいても、壁画の設置予定場所は一階入口を入った左右の壁とされているが、実際に完成作が設置されたのは既述の通り、階段室上方の左右壁面である。その大きさも「現今」完成作は「幅五尺七寸 長二十一尺三寸五分」で2月23日付記事内容とはほぼ同じだが、「開港以前」完成作は「幅五尺七寸 長十三尺七寸」で記事とは異なる。（「開港記念横浜会館建築工事説明書」「開港記念横浜会館図譜」清水組横浜支店、1917年を参照。）3月7日付記事の「五分の一の縮図」のおおよその大きさの記述と完成作もサイズの比率は合わず、壁画・天井画制作の途中で何らかの変更があった可能性も考えられる。
- 38) 有田四郎の生涯については、佐々成典・（旧姓有田）真木子『有田四郎とその周辺』1986年9月17日（私家版）に詳しい。同資料は宮崎県立美術館学芸課長園田博一氏よりご教示いただいた。また、有田四郎の展覧会出品歴については、白馬会展覧会第9回（1904年）、第13回（1910年）、文部省美術展覧会（文展）第1回（1907年）、第3回（1909年）、第4回（1910年）、第8回（1914年）への出展を確認できる。東京文化財研究所編『明治期美術展覧会出品目録』中央公論美術出版、1994年、および東京文化財研究所編『大正期美術展覧会出品目録』中央公論美術出版、2002年を参照。
- 39) 『横浜貿易新報』1917年3月15日、第7面。
- 40) 『横浜貿易新報』1917年6月18日、第5面。
- 41) 前掲、佐々成典・（旧姓有田）真木子『有田四郎とその周辺』。
- 42) 『横浜貿易新報』1917年6月26日、第7面。
- 43) 『横浜貿易新報』1917年6月30日、第7面。

図版出典

- fig.9 『港町・横浜の都市形成史』横浜市企画調整局編集・発行、1981年
 - fig.10 土方定一・坂本勝比古編『明治大正図誌 第4巻 横浜・神戸』筑摩書房、1978年
 - fig.11 『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年
 - fig.12 『開港150周年記念 横浜建築家列伝』展カタログ、横浜都市発展記念館、2009年
 - fig.13 工学院大学藤森照信教授研究室所蔵
 - fig.14 同上
 - fig.15 『横浜貿易新報』1917年6月18日、第5面。国立国会図書館所蔵。
 - fig.16 佐々成典・（旧姓有田）真木子『有田四郎とその周辺』1986年9月17日（私家版）の複写資料。宮崎県立美術館所蔵。
 - fig.17 同上
 - fig.18 『横浜貿易新報』1917年6月30日、第7面。国立国会図書館所蔵。
- * 上記以外は筆者撮影

附記

本稿執筆の契機となった横浜市開港記念会館ジャックサポーターズ向け研修講座を企画し有益なご示唆をいただいた同団体の皆様、同講座での講演の機会を与えていただいた東京藝術大学教授佐藤道信先生、名古屋市博物館学芸員五味良子氏、調査に関してご高配いただいた宮崎県立美術館学芸課長園田博一氏、工学院大学教授藤森照信先生、同研究室の小渡尚恵氏に、心より感謝申し上げます。